The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Japanese EFL Learners' Development of Grammatical Competence through Media English and Its Influence on Critical Writing
Author(s)	蔦田, 和美
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/67060
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　蔦田和美　）	
論文題名	Japanese EFL Learners' Development of Grammatical Competence through Media English and Its Influence on Critical Writing （メディア英語使用による日本人英語学習者の文法力向上と、クリティカル・ライティングへの効果）

論文内容の要旨

本研究の目的として、一つはメディア英語を使用した明示的文法指導による文法力向上を測ること、そしてもう一つはその文法演習がクリティカル・ライティングに与える影響を検証することを挙げた。

第一章　はじめに

まず研究背景として、日本人の英語力の実態、言語間距離に基づく英語教授法の適切性、文法の重要性、ライティング力の重要性、そして文法学習教材としてのメディア英語の可能性など、現在の日本の大学英語教育において考慮に値する側面について述べた。次に、本研究を授業実践研究として、メディア英語活用による文法演習の成果を調査し、またこれによる文法力向上が現在ニーズが高まるライティングに及ぼす影響を検証することにより、日本人英語学習者にとっての文法の位置づけを再確認することを本研究の意義とした。　リサーチ・クエスチョンは、１．メディア英語を使用した文法演習は文法力を向上させるか、２．文法力はクリティカル・ライティングにどのように影響するかの2点とした。

第二章　先行研究

まず「文法」の項目では、本研究における文法力を「構文に関する形式と規則、およびそれらを使用する力を統合した能力」と定義し、続いて文法の重要性、文法とコミュニケーション、文法とライティング、文法教育、そして明示性の局面から先行研究を検証し、本研究の意義につなげた。

二番目は「メディア英語」と題し、オーセンティック素材の有効性について文献を調査し、続いて英語ニュース使用の意義に関連して、言語変化の投影、メディア・リテラシーやクリティカルな思考力に関する文献を検証した。

三番目は「ライティング」について、言語習得におけるアウトプットの重要性、続いて、クリティカル・ライティングについての文献を検証するとともに、本研究における「クリティカル・ライティング」を、「クリティカリティの重要性を踏まえて、提示された情報について主観的かつ批判的に自身の見解を文章化すること」と定義した。最後に、ライティングの評価指標に関する研究を整理し、本研究における具体的なライティング評価指標の決定につなげた。

四番目の「辞書使用」では、ライティングにおいて、従来の言語的側面の評価重視がその情報源となる辞書使用を不認可としてきた傾向を示すとともに、近年のより現実的なコミュニケーションのためのライティング環境の一環としての辞書使用認可の傾向を示す文献を検証した。

先行研究の最後に、本研究に関連する著者による4件の先行研究（文法とライティング）と、1件の予備調査（辞書使用）の結果を要約し、後述する本研究の結果を補強する知見として、および本研究の協力者に辞書使用を認める根拠として引用した。

第三章　方法

まず第一の目的として、メディア英語としてのニュース英語を利用した文法演習による文法力の向上を測った。具体的には英文ニュース記事を教材として10週間の文法演習を行い、その前後に3種類の文法問題と、クリティカル・ライティング課題を課し、文法問題の正解数、およびクリティカル・ライティングにおける言語面の評価（複雑さと正確さ）に基づいて多重比較を実施し、処置前後の有意差を確認し、その大きさを効果量によって測った。

英語ニュースとしてウェブサイト上のNHK Worldから毎週数件のニュースを取り上げ、それを基に穴埋め方式の文法問題を作成したものを教材として使用した。問題は、本研究が対象とする構文力（SV構造、関係詞、接続詞・前置詞、不定詞、分詞に関する知識）を問うものとした。また文法演習については、文法に関するグループ・ディスカッションなどの教室内の協同学習を重視して学生の自らの気づきを促し、最後に教師による明示的指導という形式で進めた。また社会問題に関するディスカッションを組み入れ、クリティカルな思考力の向上も同時に試みた。

文法力向上を測るための3種類の文法問題については、実施に先立ちパイロット・テストを行い、結果の項目別分析に基づいた修正を行ったものを使用した。

クリティカル・ライティングは、1回目のテーマを「Paternity leave（父親の育児休暇）」、2回目を「Right to vote for the 18-year-old（18歳の選挙権）」とし、30分間、辞書使用可、手書きという条件で実施した。言語的評価指標は、複雑さ１（関係詞節、不定詞、分詞の相対的使用率）、複雑さ２（従属接続詞の相対的使用率）、正確さ（SV構造の相対的正解率）とし

た。

第二の目的である文法力のクリティカル・ライティング力への影響の検証のためには、まずクリティカル・ライティング力の観測変数として2変数（理解度とクリティカリティ）を設定し、英語母語話者による評価を行った。そしてこれらと、文法力の観測変数としての6変数を基に構造方程式モデリングという分析手法を使用し、文法力とクリティカル・ライティング力という潜在変数間の関係を検証した。

さらに、メディア英語およびクリティカル・ライティングに関して、学生を対象にアンケート調査、およびグループ面接を行った。特にアンケート調査ではメディア英語使用、文法の重要性、文法のライティングへの効果、文法学習への動機づけの4点についてリカート尺度に基づく結果を集計し、その中の自由記述に関しては、コード化、カテゴリー化をすることによって意見の傾向を明確化した。

第四章　結果と考察

毎週の穴埋め式の文法問題のスコアは全体として週ごとに上昇し、これはニュースをテキストとした文法問題への対応力が向上したことを示した。また社会問題に関するディスカッションは参加意欲が強く、目的とするクリティカルな思考力の向上への寄与の可能性が考えられた。

文法演習前後の3種類の文法問題の得点の変化については、いずれも有意差があり、効果量は中という結果であった。ライティングの言語面での3指標についても有意差が認められたが、効果量が複雑さ（複雑さ１、複雑さ２）に関しては大、正確さに関しては小という結果であった。すなわち正確さについてはほぼ効果が認められなかったが、伸びがあったことを示す最低条件としての有意差が認められたことから、ニュース活用の文法演習で文法力が向上したということが概ね示された。

次に、構造方程式モデリングによる分析の結果、文法力とクリティカル・ライティング力の関係は、文法演習前後で各々.49と.51となり、いずれにおいても両者には一定の相関があるという結果が示された。また演習後の結果では、文法力から産出的技能を示す変数（ライティングの複雑さと正確さ）への因子負荷量が上昇し、これは演習によって向上した明示的知識がライティングに及ぼす影響が増加したことを示唆するものとなった。またクリティカル・ライティング力から、二つの観測変数（査定者による理解度、クリティカリティ）への因子負荷量も上昇しており、これは文法力の向上に伴い、理解度とクリティカリティとして評価されるクリティカル・ライティング力という能力を学生がより発揮できるようになったという可能性を示す結果となった。

一方でアンケート調査の主な結果としては、96%がメディア英語教材使用に肯定的で、92%が文法の重要性を認識し、80%が文法のライティングへの効果を認め、そして92%が今後の文法学習の継続に対する動機を示した。また自由記述の分析においては、上記の項目に加えて、ライティングの評価方法や辞書使用などのライティング環境に関する興味、関心や、協同学習による文法学習に対する肯定的な意見などが明確化した。

第五章　結論

結論として、まずメディア英語を教材とし、明示性を重視した文法演習前後において、概ね文法力の向上が見られた。本研究は他の教材、教授法と比較するものではなく、また勿論、教室内外の様々な要因からの影響がありうると思われる。しかし、メディア英語使用の文法指導は、学生の動機向上、またクリティカルな思考力向上の可能性の点を含めて、学生の文法力向上に一定の効果が見られた。これがリサーチ・クエスチョン1に対する答えとなった。また、文法力のクリティカル・ライティングへの効果については、文法演習前後のいずれにおいても構造方程式モデリングによる分析により一定の影響力が検証された。これがリサーチ・クエスチョン2への答えとなった。

本研究の限界としては、著者自身が本研究の研究者および教授者であったことにより、文法問題の有用性およびライティング評価指標の適切性が著者の単独の判断に委ねられたこと、またアンケートや面接などの学生調査実施に際しては日常の人間関係の影響の可能性も排除できないなどの点において客観的評価に関する改善点があると考える。またライティング課題についてはトピック、デザイン、辞書使用、フォーマットなどに関する再考の必要性が浮き彫りとなった。

しかし、実際に文法演習前後で文法力が概ね向上したという点、また学生が敬遠しがちな文法学習に関して動機づけが高まり、文法学習に意欲的に取り組むようになった点において、本研究における文法演習実践の効果は示され、今後の文法演習について考える上での一助となった。また、構造方程式モデリングによる分析により、文法力とクリティカル・ライティングの一定の関係が示されたことから、現在コミュニケーション重視の傾向がある中で、大学英語教育における文法指導の位置づけについて再考する機会となることが期待される。

今後は上記の限界点を踏まえたうえで、より長期にわたる実践をおこない、多角的な局面から結果を検証することによってあらたな見解の構築に努めたい。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　蔦田　和美　）	
論文審査担当者	（職）　　氏　　名 主 査　教授　　日野 信行 副 査　准教授　今尾 康裕 副 査　教授　　義永 美央子

論文審査の結果の要旨

本論文は、英語教育の方法論に関して、先行研究と合わせ、日本の大学における著者自身の授業実践を通じて、量的及び質的に検証するものである。主たるテーマは、明示的な文法指導の再評価、主体性を備えたライティングの意義、教材としてのメディア英語（主にニュース英語）の使用等であり、具体的なデータに基づく考察を行っている。

メディア英語については、既成の教材とは異なるそのオーセンティックな性質に加え、メディア・リテラシーやクリティカル・シンキングの養成のための素材としての面に着目している。文法指導に関しては、明示的な文法教育を重視しない近年の傾向について批判的に考察し、日本のようなEFL（外国語としての英語）環境における明示的な文法指導の価値を評価する視点に立っている。ライティングについては、インターネット時代におけるニーズを念頭に、「クリティカル・ライティング」すなわち提示された情報について主体的に自己の見解を表現する能力の重要性を指摘している。さらに、授業技術としては、グループ・ディスカッション等を通じた協同学習の立場も取り入れている。

この授業実践研究においては、著者の長年に及ぶ教育実践を基盤として、ニュース英語を素材とした授業の中で10週間の文法演習を行い、その前後において（pre-testとpost-test)、文法テスト及びクリティカル・ライティングの課題を実施している。この文法演習は、文法に関する「気づき」をひとつの目的としているが、一方、近年のたとえば focus on form や noticing などのアプローチに比べると、文法規則をはるかに前面に押し出した明示的なものであることが特徴である。データ処理においては、構造方程式モデリングをはじめとする量的分析の手法を適切に用いている。また、受講生へのアンケート調査とグループ面接に基づく質的分析も併用している。

結果としては、ニュースを活用した文法演習によって文法力が向上したことが概ね示された。また、明示的な文法指導によって獲得した文法力がクリティカル・ライティングの能力の向上に役立ったことを、示唆する結果となった。さらに受講者へのアンケート調査では、協同学習への好意的な反応などが示された。

本論文のように、教育実践の積み重ねによって英語教育研究に貢献しようとする方法は、実験研究と比較すると客観的な実証性において弱いと批判される場合もあるが、しかし実験の実施によって学習者に不利益を与える心配が無く、眼前の学習者に対し教育者として常にベストを尽くす中での実践研究であるという点において、教育研究の本来の望ましい形を示していると考えられる。

先行研究における実証研究のさらなる精査が望まれること、また質的分析の部分がやや付随的な位置づけにとどまっているため、複数の研究手法を組み合わせるトライアンギュレーションの視点からはさらに深める余地があること等、本論文にはいくつかの課題もある。しかしながら、本論文は、英語教育のさまざまなアプローチを勘案したうえでの優れた授業実践及び妥当なリサーチデザインに基づく意義深い研究であり、その成果は、学術的な価値とともに、他の教育現場での実践にも資するところが大であると考えられる。全体として本論文は、博士論文に期待される高い水準に達していると言える。

また、本論文の英文は、学術論文の英語として適切であり、博士論文にふさわしいレベルの英語である。

以上のように、本論文を、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添える。